P3-36.

陰嚢ピアスを契機に発症し睾丸摘出に至った HIV 患者のフルニエ症候群

（形成外科）
○松村　怜奈、小野紗耶香、草田理恵子
　島田　和樹、綾部奈々子、小宮　貴子
　井田夕紀子、松村　　一

【はじめに】フルニエ症候群は、外陰部、会陰部を主病変とする壊死性筋膜炎で致命的になりうる疾患である。素質素因としては、糖尿病、悪性腫瘍や免疫不全患者に好発する傾向があるとされる。今回我々は、HIV 陽性患者にボディピアスの一種である陰嚢ピアスの感染を契機に発症したと考えられたフルニエ症候群を経験した。最終的に陰嚢摘出術および植皮術を経て良好に創閉鎖し得た為報告する。
【症例】49 歳男性。1 週間前より両陰嚢腫大、疼痛を認め近医泌尿器科を受診。その後、発熱、両陰嚢の発赤が肛門側と腹部へ波及し全身状態が増悪した為当院へ搬送された。問診で同性愛者であり、上半身の刺青とボディピアスを認めた為感染症を積極的に疑った。採血ではリンパ球減少、HIV 陽性と高度な炎症反応を認めた。CT では両陰嚢の膿貯留と左下腹部にかけて皮下脂肪織の炎症像を認めた為、HIV 患者のフルニエ症候群と診断した。同日泌尿器科と当科合同で、陰嚢ピアス 3 個を除去し、陰嚢切開と睾丸周囲のデブリードマンを施行した。右睾丸は漿膜が壊死していた。AIDs を発症していなかったものの CD4％は低値で免疫能は低下していた。その後、肛門病変を認めないことを確認し、第 26 病日に右睾丸は血流が悪く摘出した。第 35 病日に抗 HIV 薬の内服を開始、第 45 病日に閉創に至った。
【考察】HIV 患者の随伴症状として肛門病変が多く、フルニエ症候群へ進展する報告が散見される。フルニエ症候群を契機に早期に陽性が判明できた HIV 未治療症例であった。肛門病変は認めなかったが、陰嚢の中心にピアスを認め、そこからの感染によってフルニエ症候群を発症したと考えられた。複数の関連科の介入により早期に適切な診断を行い、積極的なデブリードマンと抗生剤加療によって治癒に至ったと考えられた。現在 HIV 患者は増加しており、フルニエ症候群に遭遇した場合、HIV 感染も念頭に置くべきである。

P3-37.

高強度身体活動を行っている男性は褐色脂肪組織密度が高い

（大学院修士課程 2 年健康増進スポーツ医学分野）
○田中　璃己、布施沙由理、黒岩　美幸
　遠藤　祐輝、安藤　　啓、木目良太郎
　黒澤　裕子、浜岡　隆文
（東京医科大学　公衆衛生学分野）
　天笠　志保

【背景】日本人成人男性の 30% 以上は肥満である。肥満は白色脂肪組織が過剰に蓄積した状態であり、生活習慣病の罹患リスクを高める。一方、褐色脂肪組織（BAT）は適応的に熱を産生するため、肥満予防の効果が示唆されている。身体活動もまた肥満予防に効果的であるが、BAT との関係は不明確である。特に身体活動の強度に注目した研究は少ない。
【目的】高強度身体活動の有無と BAT 密度の関連を検討すること。
【方法】対象者は広告掲示等で募集した 20 歳以上の健常成人男性 87 名（39.7 ± 9.7 歳、平均値±標準偏差）とした。国際標準化身体活動質問票により、歩行（W）、中等度（M）、高強度（V）の身体活動をすべて行っている WMV 群（41 名、39.4 ± 10.9 歳）と、W と M の身体活動のみを行っている WM 群（46 名、39.9 ± 8.6 歳）とに分類した。鎖骨上窩の BAT 密度は近赤外時間分解分光法、体組成は生体電気インピーダンス法を用いてそれぞれ冬季に測定した。骨格筋率および体脂肪率は、体重に対する骨格筋量、体脂肪量とした。統計解析は、対応のない t 検定、ピアソンの積率相関分析、重回帰分析を行なった。
【結果】BAT 密度は WMV 群（76.7 ± 27.9 μM）が WM 群（62.0 ± 21.5 μM）より高く（$p < 0.01$）、骨格筋率も WMV 群（45.9 ± 3.9 %）が WM 群（43.5 ± 3.7 %）より高かった（$p < 0.01$）。体脂肪率は WMV 群（18.5 ± 6.6 %）が WM 群（22.5 ± 6.4 %）より低かった（$p < 0.01$）。従属変数を BAT 密度にした重回帰分析（ステップワイズ法）の結果、BAT 密度に影響を与える因子として、内臓脂肪面積（標準化 $\beta = -0.63$、$p < 0.01$）および高強度身体活動の有無（標準化 $\beta = 0.20$、$p < 0.05$）が抽出された（調整済み $R^2 = 0.46$、$p < 0.01$）。
【結論】日常的に高強度身体活動を行っている男性

の BAT 密度は高いことが示された。

P3-38.

フィットネスクラブ新規入会者の退会に関連する心理的要因の検討

（専攻生：公衆衛生分野）
〇菊賀　信雅
（公衆衛生分野）
福島　教照、高宮　朋子、小田切優子
菊池　宏幸、町田　征己、井上　　茂

※抄録の掲載を辞退する。

P3-39.

レポート評価・返却システムを使った産科婦人科学分野におけるショート・プレゼンテーション教育

（産科婦人科学分野）
〇野平　知良
（医学教育学分野）
油川ひとみ、三苫　　博

【背景】産科婦人科学分野では診療参加型臨床実習において症例ショート・プレゼンテーション（SP）による医療面接・臨床推論の教育を行ってきた。その際、患者から収集した情報とそれによる臨床推論の過程を可視化できれば、より効果的に評価・指導に繋げることができると考え、2018 年度から e ラーニング上のレポート評価・返却システム（飛ぶノート出雲®）を導入して医療面接・臨床推論の評価・指導や学生自身の省察に利用してきた。具体的には、診療参加型実習中に模擬症例の医療面接・臨床推論とそれらの情報による SP を行った。プレゼンテーション評価ツールは大西の VSOP モデルを使用し、システム登録シート上に印刷した。シートの余白部分を医療面接時のメモ用紙として使用するよう指示し、SP 後、登録シートを使って特に症例のキーワードを視覚的に意識するようフィードバックを行った。
【対象・方法】2018 年のシステム導入前に SP 教育を行った学生（A 群 9 名）と 導入後に SP 教育を行った学生（B 群：13 名）を対象として、①各群の初回・2 回目の VSOP の評価の変化を比較した②シート記載内容と SP 評価の関連を検討した。
【結果】① 2 回目の評価で初回評価より 2 段階以上評価が上がった学生数は、A 群 1 名（11.1%）、B 群 3 名（23.1%）であった。② VSOP で「O」以上の評価を得た学生のメモを見ると、一見雑然としており記載された内容に脈絡ないように見えた。一方、情報を網羅的に列記した学生は、一見するとまとまっていても情報が少なく、評価も「S」以下の学生が多かった。
【考察】医療面接・臨床推論の過程を可視化することにより、フィードバックを与えやすく、学生が自由に省察を行う環境を提供することで学生の学びを促進できる可能性が示唆された。

P3-40.

模擬患者を経験した医科大学職員の意識調査－2 質問紙調査から

（総合診療医学分野）
〇原田　芳巳、平山　陽示
（医学教育推進センター）
窪田　裕紀
（トータルヘルスケアセンター）
大滝　純司、山科　　章
（医学教育学分野）
三苫　　博

【目的】OSCE の拡がりとともに全国で多くの SP が必要になる。本学では職員も SP として臨床実習後 OSCE を担当した。大学職員にスタッフ･ディベロップメント（SD）の機会を設けることが求められており、SD の一環として役立っているかどうかを明らかにすべく調査した。
【方法】2018 年度臨床実習後 OSCE 後に SP として担当した職員および退職者を対象に質問紙調査を行った。質問項目は前年度に実施した半構造化面接調査から 1～5 の 5 段階で回答する評定尺度法を用いた質問紙を作成した。
【結果】SP として担当した 20 名中 15 名から回答を得た。教育に関する職種の経験がある者、「OSCE」および「SP」を具体的に知っていた者は、それぞれ 2 名。SP を経験した感想は、「試験や学生の様子などがわかった」（中央値（四分位範囲）5（4-5））、